

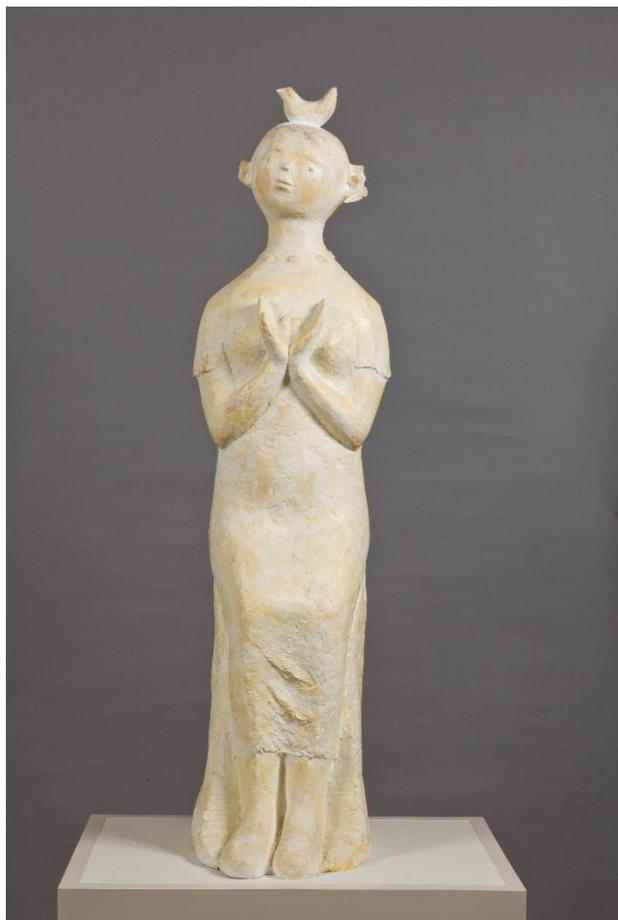
今月の

逸品

NO. 61 2022. 10~2022. 11



MUSEUM OF EDUCATION



### 「鳥と語る」

木代喜司（京都教育大学 名誉教授）作

W360×D450×H1460

1990(平成2)年 第22回日展出品

今月の逸品は、教育資料館まなびの森ミュージアム正面玄関を入ると出迎えてくれる木代喜司先生作の「鳥と語る」を紹介します。

「鳥と語る」は、1990年の第22回日展に出品された作品で、先生が退職されたときに大学に寄贈して頂きました。とてもあたたかみがある親しみの持てる作品です。誰が見ても先生の作品とわかるのは、他の具象彫刻にはない独特の表現があるからだと思います。先生はいつも「彫刻とは、形、素材、色とは何か」と根源的なあり方から問い続け、独自の造形の世界を切り開かれています。

この作品は、写実的な人体表現からは離れ、造形の本質を求め単純化し、垂直性を重視してシンメトリーで構成されています。顔はやや上向きで

微笑み、身体は腰かけて正面を向き、両手を前にした静のポーズですが、全体の丸みのある形、そして石膏の素材感と色から情感が湧いてきます。どこからか小鳥が飛んできて頭の上にそっと止まり、胸の前で開けた両手の中には、なんとハートの形が刻まれています。やさしさや楽しさまでが伝わり想像力が湧き、見るものに語りかけてきます。

単純化された形なので、構成において鳥は重要なモチーフであり、存在であり生命でもあります。彫刻は造形的な構成力がとても大切であるので全体のバランスを考えて取り付けられています。何故、鳥なのかその真意は分かりませんが平和・希望のシンボルであり祈りでもあるのか、また制作の道しるべなのか、作品を見ながら想像してみると楽しくなります。

色に関してはかなりの時間を費やされています。クリーム色をつけた後、石膏を重ねたりして優しい色合いの表面に、再びノミとやすりで削ったりして色をつけながら形を作り上げます。その繰り返しの途中で語りかけるフォルムになっていきます。このように形、素材、色を駆使した造形は安らぎを感じる詩的なやさしい空間を作りだします。

ぜひ一度、心を無にして作品と向き合ってください。きっと笑顔になって語り合えると思います。

執筆者：谷口淳一（美術科 教授）

※教育資料館で展示しています。